

近世の光明真言信仰資料（その三）

——細谷宥哲著『光明真言假名抄』（延宝七年《一六七九》版）——

ニールス・ゲルベルク

一 初めに

近世の光明真言信仰資料は、概ね二つのグループに分けられる。一つは漢文体で書かれた文献で、もう一つは主に仮名で書かれた文献である。漢文体の文献は、専門家（字僧）を讀者として想定していて、内容もかなり難しいものが多いが、仮名文献の多くは、逆に仏教に関する知識がそれほどない一般信者の為に書かれているといえる。「近世の光明真言信仰資料（その一）」、「同（その二）」で紹介した鏡寛や向旭山恵空の著作は、この二つめのグループに分類できる。

今回紹介する細谷宥哲の著書も、既にその表題において仮名文献であることを示しているように、明らかに一般信者を讀者として意識した著作であるといえる。寛文七年（一六六七）に出版された以空の『玉かがみ』と並んで、光明真言仮名文献の先駆的な存在であって、近世の光明真言信仰を説明するには欠かせない資料である。

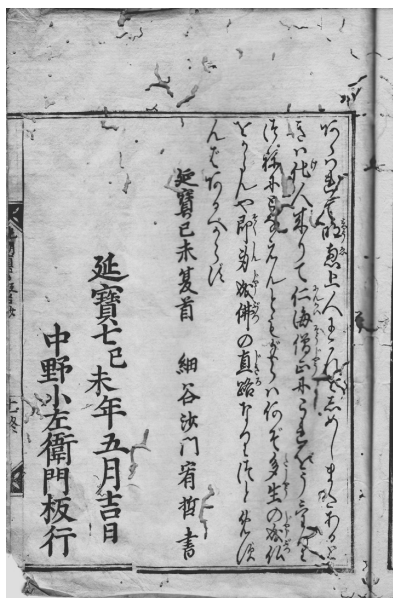
二 『光明真言假名抄』の著者細谷宥哲

『光明真言假名抄』の奥書によると、この書は、「細谷沙門宥哲」と名乗る人物によって書かれた。しかし、細谷宥哲については何も手掛かりがなく、『国書人名辞典』などの参考書にも挙げられていない人物であるが、その著作を詳細に分析すると、著書と著者について、次のようなことが判る。

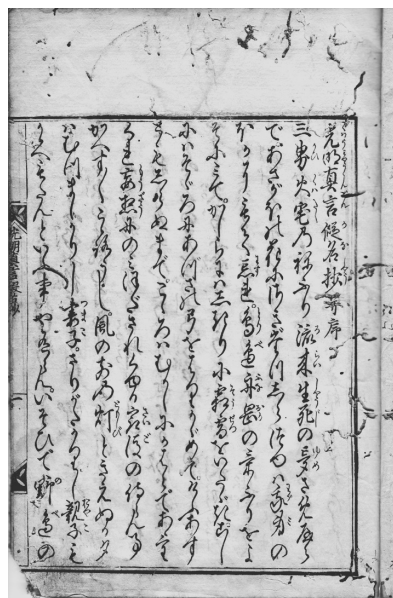
第一に、『光明真言假名抄』は、「延寶己未夏首」即ち延宝七年四月に書かれ、同年五月に京都書林十哲の一人で、京都寺町に版元業を営んでいた中野小左衛門によって出版された。執筆と出版が殆ど同時期であることから、出版者からの依頼作である可能性が高く、依頼された著者も京都市内か京都近辺に住んでいたとも考えられる。中野小左衛門は真言宗の書物を手掛けた出版者と言われているが、残っている出版物から見ると、漢籍、仏書、医学書、日本の古典文学やその注釈書、更には『日本分形圖』のような地図まで、幅広い分野にわたって出版事業を行っていた人物であった。その中に、慶安四年（一六五二）に出版された片仮名本『鴨長明發心集』のような、一般信者向けの仏教説話集も含まれていることは注目すべきである。

第二に、『光明真言假名抄』の著者は、道範著『光明真言四重釋』や頼慶編『光明真言鈔』に触発されて、教義的にも真言宗の立場をとっている⁽²⁾ので、真言僧であることは間違いないだろう。

第三に、『光明真言假名抄』は、以前筆者が「寛文の転機」と呼んだ亮汰（一六二二～一六八〇）の注釈書出版の後に書かれているが、引用から判断すると、使用されたのは、執筆時期に近い亮汰の改訂版（寛文十二年刊の『光明真言經照闡鈔』）ではなく、初版（寛文七年刊の『光明真言經鈔』）のほうである⁽³⁾。亮汰の注釈書が広く読まれるようになったのは、『照闡鈔』出版後であったが、細谷宥哲は亮汰の注釈書読者の中でも初期に属していることになる。



(11オ) 奥書と刊記



(1オ) 序の冒頭

初版が流布したのは恐らく主に真言新義派内だったと思われるので、宥哲は新義派の僧侶であったことも考えられる。

第四に、文章から見ると、『光明真言假名抄』の著者は談義と説教にかなり慣れているようで、「序」以外は講義や講話の筆記録のような印象さえ与える。即ち、細谷宥哲は向旭山恵空と同様、定期的に光明真言について講義していたであろうと思われる。その説法の評判を聞いて、中野小左衛門が執筆を依頼したとも想像できる。

三 『光明真言假名抄』の内容と構成

『光明真言假名抄』は、その内題「光明真言假名抄（并序）」が示しているように、序文と本文の二種類の文章からできているが、それぞれの文章は文体的にも性質がやや異なる。既述のように、本文のほうは著者の口述筆記という性格が強くて、話題を展開し発展させる度に、「さて」、「さてまた」などでつないでいる。

一方、序文は和歌文学の表現も取り入れ、鳥辺山、舟

岡のような歌枕や、梓弓、淺茅が原といった歌詞を使い、人生の無常を表わす文章になっている。改めていうまでもなく、こういう無常觀文学は宥哲独自のものではなくて、『方丈記』に始まる長い伝統を持っている。

序文を詳しく見ると、大きく三段に分けられる。第一段には人生のはかなさ、老いてゆく苦しさ、死別による悲しみや死後に味わう罪業の報いの恐ろしさが描かれている。後に掲げる翻刻から、その部分を解りやすい表記に改めた上で、次に示しておく（以下、一段下げの部分は、同様）。

三界火宅の眠り、流來生死の夢覺めやらで、朝顔の花に先立つ白露は我身のほかにもて忘れ、鳥邊・舟岡の煙を他所に見て、頭にはしきりに霜雪を頂き、腰にはそぞろに梓の弓を張り屈めて、今日明日とも知らぬまで、心は昔に変はらで、明け暮れ妄想にのみ絆され、悔ゆる最後の侍らん事かへすがへす心憂し。風の前の燈と消えぬる夕は睦まじかりし妻子、去り難かりし親子も抱へ持たんといふ事や有らん。急ひで野邊の（1ウ）煙とこそなりぬ。空しく横切る雲ばかりを恨み、朝に行ひて別れし野邊を見れば、淺茅が原の秋風の身に凍みて、纒かに名残と見ゆるは、形もなき白骨なり。しかれば、われもはかなき身、又人もあだなる世なり。何ぞや長からぬふゆの身を富士の高根にもてまはり、去りやすき色香に愛を留めて、未來は永劫の苦しみを思はざるや。この身むなしく過ぎて冥土に至り、善事を尋ねらる時は、いかに答へん。玻璃の鏡に向かはば、慳貪、瞋恚、愛着、我慢の形のみ見えて、悔しく悲しくこそあらん（2オ）ずらめ。又獄卒の出入る道には、膝を屈めて一人嘆き、阿鼻の強き炎には、あひなる屍にぞあらんずらめ。佛のみこれらの苦惱を御憐れみましまして、百億の契經を説き給ふ。

その上で、次に見られるように、罪人を救うのは真言が最も有効な手段であることを、宥哲が經典引用で証明しようとしている。最初に挙げられている『六波羅蜜多經』⁴の引用は、光明真言信仰の先行文献にも出ているもので、ここは、頼慶の『光明真言鈔』の序文からの孫引きであると考えられる。罪人を救う目的から諸仏の覺因に移るのは

少々強引な論法ではあるが、この強引な論法によって、有哲は偽経を引用して（この著作における偽経の引用は、この箇所から始まる）、本題である光明真言という主題に到達できるのである。

さてその中に真言陀羅尼と申奉るは、諸教の力に及ばざる重罪の人を救はん爲に説き給ふ。諸佛の肝心、成佛の直路なり。故に六度經に、「或ひはまた有情諸の惡業、四重八重五無間罪を作り、方等經を謗し、一闍提等種々の重罪を消滅する事を得せしめ、速疾に解脱し、頓に涅槃を悟るには、（2ウ）しかも彼が爲に諸の陀羅尼藏を説く」と宣へり。又「三世の諸佛も光明真言の力によりて正覺を得」とは此經の謂なり。

第三段では、偽経の複数の引用によってこの光明真言の功德を説いている。しかし、冒頭にある「光明心殿」は偽経には出ておらず、別の先行文献である道範の『光明真言四重釋』に拠っていると考えられる。ちなみに道範はこの言葉を、「光明」という言葉の解釈の為に、『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經』の冒頭部分から採っている。

そもそも光明真言と申し奉るは、大日如來光明心殿の中にして無邊の聖衆に對して説法おはしましけり。その時に三千大千世界に光明を放つて、その中の地獄・餓鬼・畜生・修羅一時に極苦を離れ、速やかに正覺を得るが故に光明真言と名づくるなり。もしこの真言を一遍となふる功德は百億無量の大乗經を誦する功德にも勝れたりとなり。もし一切衆生あつて、この光明の呪を聞く事を得ば、（3オ）必ず無始輪廻の生死の重罪を滅して、如來の界會に入る事を得ん」と言へり。

最後の文は、以上の三段の総結のようなものである。

しかる時は、この真言の三昧に入て現身に無量の罪障を滅し、早く生死の肩を離れ、菩提常住の妙果に至るべきものなり。

本文もまた三つの段落に分けられる。第一段では光明真言の様々な解釈を取り上げ、第二段は偽経の複数の引用によって、この光明真言の功德を説いている。第三段は、テーマをもっと一般的に、「この世はみな無常である」こと

についての説法として展開させる。結びの文では再び頼慶の『光明真言鈔』の序文に戻り、頼慶の前記著書から、元暁、源信、明恵、仁海、それぞれの光明真言信仰にまつわるエピソードなどを引いている。

本文の第一段は道範の『光明真言四重釋』からヒントを得ていて、光明真言を「淺より深に至るまで」の、六段に分けて解釈している。実はこの光明真言 (Om amogha Vairocana mahā mūdra maṇi padma jvāla varttaya hūm phatu svāhā) に対しては、様々な解釈が既にサンスクリットの原文において可能である。例えば mahā mūdra を一つの熟語 (mahāmūdra 「大印」) として捉えるか、或いは二つの単語 (mahā と mūdra 「大」と「印」) として解釈する等々。ちなみに亮汰の注釈書では、光明真言を九句と六句との二種類に分ける分け方が見られる。有哲の第一段は、道範の第三の解釈、即ち「祕の中の深祕」の解釈である五方五仏に当て嵌まる解釈であるが、道範が明記している五智は省略されている。

(一イ) 眞言に曰く、

唵阿謨伽。尾盧遮那。摩訶穆陀羅。摩尼婆頭摩。蘇婆羅婆娑唎陀耶吽發吒娑婆訶

この眞言の論するには、淺より深に至るまで重々の心あり。

先佛身の一々に譯しては、第一の句は、中央大日如來、「まかばだら」とは、東方阿閼如來なり。「まに」とは、南方寶生如來、「はんどま」とは、西方阿彌陀如來、末の句は、北方釋迦牟尼如來なり。かくのごとく五智五佛は、諸尊の功德を備へ奉れば、一切の佛身この眞言の中(4ウ)に接し盡すなり。

第二段では、偽經の中に見られる句義釈を取り上げているが、Vairocana と svāhā の解釈を省略しているのが、光明真言を四句に分けることになっている。

（一ロ）さて又一々の密言に譯しては「唵あぼきや」とは、法身・報身・應化の三身如來の密言なり。「まかぼだらまにはんどま」とは、四佛四菩薩十六大菩薩の心中の密言なり。「じんばらはらりたや」とは、三世三劫の諸佛の密言、一切菩薩の密言なり。「うんはつた」とは、大日如來と阿彌陀佛との大神力の密言なり。然れば、三世の諸佛の内證の秘密言は皆この眞言の中に接し盡すなり。

第三段は光明眞言を八句に分けていて、サンスクリットの原文の意味に最も沿った解釈といえる。また、それぞれの語句に主に亮汰の『光明眞言經鈔』から採った伝統的な解釈も付け加えられている。なお、hūm phatu の別釈として取り上げたものは、偽經の「破裂地獄、成於淨土句」による。

（一ハ）さてこの眞言の梵字を漢語に従へて一々に論ずれば、「唵」とは、歸命のことなり。人の重ずる（5オ）ところは、命根に如くはなし。只この無二の命を以つて佛寶に趣き向かふ理なり。およそ五體を地に投げて、かつて餘念をうち捨てて、一心清淨に信を起し、「唵」と唱ふるその言葉は、まことに歸命の理なり。また經の中に、「陀羅尼の母は、いはゆる唵字なり」と説き給へば、未曾有なる次第なり。釋迦牟尼如來は、此唵字を觀じ給ひて、究竟の覺を開き給ふとは、守護國界經の説なり。

「あぼきや」とは、不空の義、また無間の義なり。内には自證の大樂に住し、外には化他の悲門に至り、間斷なき理なり（5ウ）り。

「べいろしやなう」とは、日の異名なり。法性の日輪の大千界を救ふをば、世間の日に譬へて述ぶ。

「まかぼだら」とは、大智印とて諸尊の相好のことなり。

「まにはんどま」とは、寶紅蓮華の事なり。諸尊面々の三昧なり。

「じんばらはらりたや」とは、光明心の事なり。愚癡の闇を離るる事なり。

「吽發吒」とは、「吽」は兇恐怖の義、「發吒」とは、叱呵の事とて、一切の魔障をおそれしめ、大神威力の光明の功力にて諸魔頼りを失ひ、忽ち調伏し退没するの理なり。⁽¹⁴⁾然る間、この眞言を唱ふる輩は、一切の災難を逃れ、現在安樂（6オ）なり。又過去の罪を滅し、後生安樂に三世の利益深々なり。また「うんはつた」とは、地獄を破り、淨土となす言葉なり。この眞言には、地獄を破る功能あり。

「娑婆訶」とは、成就の事なり。⁽¹⁵⁾大菩提を成就する事なり。

第四段は、光明眞言を三毒の退治薬として解釈しているので、眞言の解釈を *mani' padma v jvāla vartaya* に限っていることになる。

（一ニ）さてまたこの眞言を約むれば、貪・瞋・癡の三毒の煩惱を離るる理なり。この故に、「まに」とは、寶珠の事にて、珠は貪欲の苦しみを離れ、「はんどま」は、蓮華の事なれば、蓮華は瞋恚の穢れを離れ、「じんばらはらはりたや」とは、光明の事にて、光明は、愚癡の（6ウ）闇を破りて、三毒を離るれば、八萬四千の煩惱は月出て闇を離るる如くなり。

第五段は、再び第三段の解釈を取り上げ、それを眞言宗の一心説に照らし合わせることによって説明している。

（一ホ）さてまたこの眞言を以つて一心に接在すべし。心を離れてあることなし。迷へる人の前には地獄・極樂、娑界・佛界隔たりて、これありと雖ども、悟れる人の前には、十法・方界隔てなく、眞言・妄言よそになし。

先「唵は歸命の事」とは、一心佛に歸する事なり。歸するも一心、歸せらるるも一心なり。

「あぼきやは、不空の事」とは、一心の體用は自他に遍在して空しからざる事なり。

「べいろしやなうとは、日の別名」なれば、一心の物を照らす（7オ）事、了々として分明なる事を述べり。

「まかぼだらは大印の事」とは、妙用無窮の心頭は、印可決定して、三世に改まる事なき謂なり。

「まにはほうしゆの事」とは、心は寶珠に比してよく物を出生する理なり。

「はんどまは蓮華のこと」なれば、心は本來、性として一切の穢れを離れて自性清淨なる事を言へり。

「じんばらはらはりたやとは、光明心のこと」とは、心の光明誤らずして諸法を縁ずる理なり。

「うんはつたは魔障を離るること」とは、魔は心に迷して起るが故に、心本來、迷を離れて、(7ウ) 魔界ある事なき理なり。

「そはかとは、成就の理」なれば、本無煩惱、元是菩提の理なり。

第六段は、光明真言の解釈というより、すべての真言に当て嵌まる阿吽不二説を述べている。光明真言の最初の唵おん字が阿字を含む四字の合成でできているという解釈は、既に明恵の『光明真言句義釋』に見える説である。

(一へ) さてまた、惣じて真言の心得ふるに、始め阿字は胎藏界の本不生の理體、終りの吽字は金剛界の心智の用にて、兩部不二の内證なり。

本文の第二段は殆ど偽經の引用によって構成されている。

この真言を唱ふる功德を記すに、「⁷³死し「た」るもの爲に、一返唱ふれば、無量壽佛は極樂淨土に引導し給ふ。⁷⁵もし墓所にて、四十九返誦ずれば、無量壽如來は、直に荷負して決定して極(8オ)樂淨土に生ぜしむ。⁷⁶もし卒塔婆を以つて父母の墓所に立つれば、無量億劫を経るとも惡趣に墮することなく、蓮華座の上に化生する。⁷⁹もしこの真言を唱ふる法師あつて、その風來たりて身に吹かれれば、悉く佛界に生ず。⁸⁰もし畜生・異界の身に吹かれれば、人天上に生ず。⁸⁸もし死したる父母を極樂淨土に生ぜしめんとするには、西に向ひて十萬返或ひは一千返誦ずれば、決定して極樂に生ず。⁹⁰もしまたこの真言と阿彌陀佛の梵字とを書き副えて、父母の墓に(8ウ)置けば、⁹¹阿僧祇劫を経るとも、惡趣に墮することなし。

⁹²極樂淨土の寶座の上に往生せん時に、眉間より白毫の光明を放つが故に、⁹³光明真言と名づくとなり。⁹⁸もし女人あつ

て、女身を厭ひ、男身とならんとして、誦持せば、必ず男身を得ん。⑨もし常に誦持せん女人は、大梵天王となることを得ん。⑩惣じて常に唱ふる人は、⑪阿彌陀佛荷負し給ふて、極樂淨土に生ぜしめ、三十二相八十種好を満足し、速やかに正覺を生ぜん」と言へり。

何が故にとなら（9オ）ば、彌陀は、大日の智の用なり。大日は彌陀の理體にてあるが故なり。然る間、儀軌に「⑫これ大毘盧遮那如來と無量壽如來との心中の神呪なり」と宣へり。又云、「⑬この眞言をば、百億無數の諸佛如來の母とし、⑭百億無數の菩薩の母として⑮釋迦如來常に恭敬禮拜して、正覺を得給ふ」となり。疑ひを生ずることなかれ。

本文の第三段は、序文の第一段に相当するもので、同じく「無常」をテーマとして展開させている。しかし、序文が和歌文学の表現を借りているのに対して、本文の方は漢籍や仏典に出ている比喩を取り入れている。漢籍からは有名な莊周の胡蝶の夢の話や、影を捕まえることと同様に不可能な風を繋げる譬（『漢書』の郊祀志等）などが見え、仏典からは無常觀文学に欠かせない屠所の羊（『涅槃經』や『往生要集』等）や、散乱心の譬えとしてよく引かれる意馬（『宝積經』では、識王は迫る敵の前に身の城に籠り、暴れないように意の馬を調習し警備にあたるが、無常の軍の攻めによって終に城を棄てて別のところへ逃げる⁽¹⁶⁾）が出てくる。

尋ねれば、それ釋尊最後の一句に、「世はみな無常」と宣へる。まことに天地萬物・人天鬼畜に至るまで、幾そばくの商品々のその（9ウ）中に、滅せぬ物の一つなし。さて有爲無常の萬法を、唯「この世はみな無常」と宣へる一句の中に説き給へる。げに昨日過ぎ今日過ぎて四大日々に衰へ、死門夜々に迫り來り、屠所の羊の歩みに任せて、朝夕を知らぬ身が使々と移ろふ有様は、莊周の夢に異ならじ。いかに可愛ひの蘭朋も別離の涙現はれて、雲夢の會に微塵変はず。怒りし人も死し去り、愛せしものは白骨と現ず。まさに有爲轉變の時、風を係げる人のあらんや。さてもこの身過ぎ去ては、如何なる（10オ）形を受くるらん。生じ、生じ、生じ、生ずれども、生の始めを知らず。死し、死し、死し、死すれども、死の終り

に暗し。哀れなるその中比、幻化影像かと思しき間に、眼を開けば境界あてやかに浮かび、耳を敲つれば、哥詠音楽の品々思ひを進む。千變萬轉の妄慮、刹那々に染み積もり、心馬惡道に離れ、三毒五慾の城におち入り、既になせる善根とも修して、速やかに臨終の夕とありし劫は、悔ゆともさらになんあらまし。況や老少限りなき身なれば、早く菩提を生じて（10ウ）努めんにはしからじ。衆罪は露として草むらごことに置くとも雖ども、惠日は消す事早しとは佛陀の教へ凝諦あらまし。誰も持てる惠日を無明の闇夜に隠し晦まし、滅罪の光を失ふ。悲しきにはあらずや。眞覺は本有なるに知つて覺せず、無明は本無なるに迷つて斷せず。悲しきにはあらずや。早く衆罪を滅せしめん爲なれば、この大甚深の眞言を説き給へる。樂しきにあらずや。

締め括りの文では、頼慶の『光明眞言鈔』から、「祖師先德皆信シレ之ヲ、自宗他宗同ク貴フレ之ヲ。華嚴ノ元曉ハ披テ二代ノ聖教ヲ、他作自受ノ大要ニハ獨リ捧ニ此神呪ヲ、天台ノ惠心ハ撰シテ往生要集ヲ、往生淨土ノ本文ニハ出セリニ此眞言ヲ。他家既ニ專ニスレ之ヲ。密宗何ソ疎ニセンレ之ヲ哉。（省略）仁海僧正ニハ亡者來テ親リ稟ケレ之ヲ、明惠上人ニハ文殊直ニ授ケ玉フレ之ヲ。大御室ノ性信ハ每ネニ治シニ非人ノ重病ヲ、宮ノ僧正覺源ニハ特ニ作スニ御靈ノ託宣ヲ。皆見タリニ于本傳ニ」の文章を取り出し、順番を変え省略した形で載せている。

天台の惠心も往生淨土の本文にこれを備へ、華嚴の元曉も一切經を開ひて他作自受の大要に奉る。或る時は文殊（11オ）現れて、明惠上人にこれを示し、また或る時は、化人來りて仁海僧正にこれを受けり。常に唱えん輩は、何ぞ多生の成佛をやらんや、即身成佛の直路なり。努めずんば、あるべからず。

四 『光明眞言假名抄』の伝本

今回翻刻した底本は架蔵の版本、美濃判（横十八センチ縦二十七センチ）の冊子で、紐で五ツ目の和綴じで袋綴さ

れている。表紙は茶色で、裏紙はあるが、剥がれている。元の題簽はなくなっているが、その跡から横三・三センチ縦十五・五センチのものだったことが判る。テキストは1オから11オまで印刷されている。匡郭は横十五センチ縦二十・七センチの四周双辺の子持枠で、版心には書名「光明真言假名抄」と丁数がある。本文は一頁あたり十一行、各行平均二十字で印刷され、一箇所を除き改行はない。序文と本文の間に、一頁半ほどの空白があり、本文の唯一の改行は（9オ）の八行目の後（本文第三段の前）にある。平仮名体で書かれ、殆どの漢字にはルビが付されていて、清音濁音も区別されているが、時には（2オ）の「重罪・重罪」のように濁音の表記が部分的に墮ちている。大きなミズプリントはないようだが、一箇所脱字と思われるところ（7ウ「死し？るもの」は「若爲死者」の訳で、恐らく「死し」「た」るもの」のミス）がある。

『国書総目録』には版本の所在が記載されていないが、写本として東京大学図書館蔵本（C40/832）が載せられている。表紙は新しく作り直されたようで、左上の題簽「光明真言假名抄 單」の他に、真ん中にもう一つの白い紙に「光明真言假名抄 全」と書かれている。寸法は版本よりやや小さめ（横十五・七センチ縦二十三・四センチ）だが、本文は版本と全く同じ体裁で、行数だけではなく、字体まで版本の字を真似ていて、影写本のようなものである。但し匡郭と版心はない。ルビには誤写が時々あるが、その多くは濁点忘れで、仮名の母体違いも少しは見られる。ごく僅かだが、逆に版本で忘れられていた濁点（4オの真言の「まかばだら」のルビ）を、書写した人が補っている（同じ4オの真言のところに、写本が「じんばら」の濁点を落とし、「眞言にはく」と「うんはつた」に別の母体仮名を使用している）。版本との大きな違いとしては、（11オ）の宥哲の奥書は記載されているが、中野小左衛門の刊記が省略されている点である。

五 翻刻に当たって

以下の翻刻に当たっては、原本に使用されている異体字や略体字をできるかぎり版本に近い形で残した。版本のルビは、清音・濁音を問わず原本のまま翻刻したが、次の合字を単字に置き換えた。即ち、①こそ、②こと、の二つである。「給（ふ）」に相当する当て字「玉（ふ）」は、版本のまま翻刻した。また、繰り返しのマーク（く、ゞ）は、それに相当するひら仮名をカッコ「」内に改め、脱字はカッコ「」内に補った。紙幅の都合上、原本にある改行は行なわず、代りに「」によって原文における改行の位置を示した。

(1オ)

光明真言假名抄（并序）

三界火宅のねふり、流來生死の夢さめやら／で、あさがほの花にさきだつしらつゆハ我身の／ほかにもて忘れ、鳥邊・舟岡のけふりをよ／そにミて、かしらにハしきりに霜雪をいた〔だ〕き、こし／にハそ〔ぞ〕ろにあづさの弓をはりか〔が〕めて、けふあす／ともしらぬまで、こ〔こ〕ろハむかしにかはらで、あけ／くれ妄想にのミほだされ、くゆる最後の侍らん事／かへす〔かへす〕こ〔こ〕ろうし。風の前の灯ときえぬる夕／ハむつまじかりし妻子、さりがたかりし親子も／か〔か〕へもたんといふ事や有らん。いそひて野邊の（1ウ）けふりとこそなりぬ。むなしくよこぎる雲ばか／りをうらみ、朝に行てわかれし野邊をみれば、あ／さぢが原の秋風の身にしミて、わづかに名残／とミゆるハ、形もなき白骨なり。しかれば、われも／はかなき身、又人もあだなる世なり。何ぞやなが／からぬふゆの身を富士の高根にもてまはり、さり／やすき色香に愛をと〔ど〕めて、未來ハ永劫の苦ミ／をおもハざるや。此身

むなしくすぎて冥土めいどにいたり、善事ぜんじをたづねらる〔る〕ときハ、いかにこたへん。頗梨はりのか〔が〕みにむかは〔ば〕、けんどん、しんる、あひぢやく、がまんのかたちのミみえて、くやしくかなしくこそあらん（2オ）ずらめ。又ごくそのいでいるみちにハ、ひぎをか〔が〕めてひとりなげき、あびのつよきほのほにハ、あひなるかばねにぞあらんずらめ。佛ほとけのミこれらの苦惱くごうを御あはれミまし〔まし〕て、百億ひやくおくの契經けいぎょうをときたまふ。さて其中に眞言陀羅尼しんごんだらにと申奉るハ、諸教しよきょうのちからにおよぼざる重罪ちゆうざいの人をすくはんためにとき玉ふ。諸佛しよぶつの肝心かんじん、成仏じやうぶつの直路じきろなり。故に六度經ろくどきやうに、「あるひハまた有情うじやうもろ〔もろ〕のあくごう、四重八重しじゅうはちじゅう五無間罪ごむげんざいをつくり、方等經ほうとうきやうを誦し、一闡提等せんたいとうしゆ〔じゆ〕の重罪ちゆうざいを消滅しょうめつする事を得せしめ、速疾そくしつに解脱げだつし、頓とんにねはんをささるとるには、（2ウ）しかもかれがためにもろ〔もろ〕のだらに藏ぞうをとく／とのたまへり。又、「三世の諸佛も光明眞言のちからによりて正覺しやうかくを得」とハ此經の謂いひなり。そも〔そも〕光明眞言と申奉るは、大日如來にちよびくはうみやうしんでん光明殿くわうみやうでんの中にして無邊むへんの聖衆しやうじゆに對して説法せつぽうおはしましけり。「其時に三千大千世界さんせんぢやくせんせかいに光明をはなつて、其中の地獄ぢごく・餓鬼がき・畜生ちくじやう・修羅しゆら、一時に極苦ごくくをはなれ、すみやかに正覺しやうかくを得が故に光明眞言と名づくるなり。若此眞言を一返むしつとなふるべくハ百億無量ひやくおくむりやうの大乗經だいじやうきやうを誦じゆするくどくにもすぐれたりとなり。若一切衆生もしいつさいしゆじやうあつて此光明の呪しゆを聞事きくじを廻まわバ、（3オ）かならず無始むしの生しやう死じの重罪ちゆうざいをめつして、如來にょらいのかいゑに入事にじを得」といへり。しかるときハ、此眞言の三昧さんまいに入いて現身げんしんに無量むりやうのさいしやうをめつし、はやく生しやう死じのとぼそをはなれ、ぼだい常住じやうぢやうの妙果めうくわうにいたるべきものなり。

延寶己未夏首一日。

（3ウ）

（白紙）

（4オ）

光明真言假名抄

真言曰、

唵阿謨伽。尾盧遮那。摩訶穆陀羅。摩尼婆頭摩。

蘇婆羅婆羅婆陀耶吽發吒娑婆訶

此しんごんのさとするにハ、淺より深にいたるまで／重々のこ「こ」ろあり。先佛身の一々にやくしてハ、第一の句ハ、中央大日如來、「まかばだら」とハ、東方あしゆ／く如來なり。「まに」とハ、南方ほうしやう如來、「はん／どま」とハ、西方あみだ如來、すへの句ハ、北方釋迦牟／尼如來なり。かくのごとく五智五佛ハ、諸尊の／くどくをそなへ奉れば、一切の佛身此真言の中（4ウ）に接しつくすなり。扱又一々の密言にやくしてハ、「唵あぼきや」とハ、法身・報身・應化の三身如來／の密言なり。「まかばだらまにはんどま」とハ、四佛四／ぼさつ十六大ぼさつの心中のミつごんなり。「じ／んばらはりはりたや」とハ、三世三劫の諸仏のみ／つごん、一切ぼさつのミつごんなり。「うんはつた」とハ、大日如來とあみだ仏との大神力のみつごんなり。／然れば、三世の諸仏の内證の秘密言ハミニ此真言／の中に接しつくすなり。さてこのしんごんの／梵字を漢語にしたがへて一々にさとすれ／ば、「唵」とハ、歸命のことなり。人のおもんずる（5オ）ところハ、命根にしくはなし。た「だ」この無二のいの／ちをもつて佛寶におもむきむかふことはり／なり。およそ五昧を地になげて、かつて餘念を／うちすて「て」、一心清淨に信を起し、「唵」ととなふるそのことは「は」、まことに歸命のことはりなり。また經／の中に、「だらにの母ハ、いはゆる唵字なり」ととき／玉へば、未曾有なる次第なり。釈迦牟尼如來ハ、此唵字を觀じたまひて、究竟の覺をひらき玉ふ／とハ、守護國界經の説なり。「あぼきや」とハ、不空の義、／また無間の義なり。うちにハ自

證の大樂に住し、ほかにハ化他の悲門にいたり、間斷なきことハりな（5ウ）り。「べいろしやなう」とハ、日の異名なり。法性の日輪の大千界をすくふをば、世間の日にたとへてのぶ。「まか／ぼだら」とハ、大智印とて諸尊の相好のことなり。／「まにはんどま」とハ、寶紅れんげの事なり。諸尊面／々の三昧なり。「じんばらははりたや」とハ、光明／心の事なり。愚癡のやミをはなる「る」事なり。「吽發／吒」とハ、「吽」ハ恐怖の義、「發吒」とハ、叱呵の事とて、一／切の魔障を、おそれしめ、大神威力の光明の功力／にて諸魔たよりをうしなひ、たちまち調伏／し退没することハりなり。然間、此眞言をとなふ／るともがらハ、一切のさるなんをのがれ、げんざるあんならく（6オ）なり。又過去の罪を滅し後生安樂に三世の利益／深々なり。また「うんはつた」とハ、地／ごくをやり、じや／うど「と」なすことばなり。此しんごんにハ、ぢ／ごくをやぶ／るくのふあり。「娑婆訶」とハ、成就の事なり。大／ぼだぬをじやうじゆする事なり。扱またこの／しんごんをつ「づ」むれば、とんじんちの三／ごくのぼん／のふをはなる「る」ことハりなり。この故に、「まに」／とハ、寶珠の事にて、たまはとんよくのくるし／ミをはなれ、「はんどま」ハ、れんげの事なれば、れ／んげハしんるのけがれをはなれ、「じんばらははりたや」とハ、光明心の事にて、光明ハ、ぢちの（6ウ）やミをやぶりて、さん／ごくをはなるれば、八万四／千のぼんのふハ月いで「て」やミをはなる「る」ごとくな／り。さてまたこのしんごんをもつて一心に接在す／べし。心をはなれてあることなし。まよへる人のま／へにハ地獄極樂娑界佛界へだ「た」りて、これあ／りといへども、さとれる人のまへにハ、十法方界へだ／てなく、眞言妄言よそになし。先「唵」ハ歸命の事／とハ、一心佛に歸する事なり。歸するも一心、歸せらる／るも一心なり。「あばきやハ、不空の事」とハ、一心の躰／用ハ自他にへん／ざるして不空事なり。「べいろしやなう」とハ、日の別名／なれば、一心の物をてらす（7オ）事、了々として分明なる事をのべり。「まかばだ／らハ大印の事」とハ、妙用む窮の心頭ハ、印可け／つじやうして、三世にあらたまる事なき謂なり。

り。／「まにハほうしゆの事」とハ、心ハほうしゆに比して／よく物を出生することハりなり。「はんどまハ、蓮／花のこと」なれば、心ハ本來、性として一切のけ／がれをはなれて自性清浄なる事をいへり。「じん／ばらはらりたやとハ、光明心のこと」「と」ハ、心の／光明あやまらずして諸法を縁することハりなり。／「うんはつたハ、ましやうをはなる「る」こと」「と」ハ、まハ心に／めいしておこるかゆへに、心本來、迷をはなれて、（7ウ）まかひある事なきことハりなり。「そハかとハ、／じやうじゆのことはり」なれば、本無ぼんのふん／是ぼだいのことはりなり。さてまた、そうじて／しんごんのこ「ご」ろふるに、はじめあじハたいぞ／うかいの本不生のりた、おはりのうんじハ／こんごうかいの心智の用にて、兩部不二のなひ／しやうなり。此しんごんをとなふるくどくをしる／すに、「死し」「た」るもの「の」ために、一返となふれば、むり／やうじゆぶつハごくらくくじやうどにみんどうし／たまふ。もし墓所にて、四十九返じゆずれば、むりやうじゆ如來ハ、直に荷負して決定して極（8オ）樂じやうどに生せしむ。もしそとばをもつて／父母の墓所にたつれば、無量億劫をふるとも／あくしゆにだすることなく、れんげぎのうへに、け／しやうする。もし此しんごんをとなふる法師あつて、其風きたりて身にふかれれば、こと「ご」くぶつ／かひに生ず。もしちくしやういるひの身にふかれれば、人天上に生ず。もし死したる父母をこくら／くじやうどに生ぜしめんとするにハ、西にむかひ／て十万返あるひハ一千返じゆすれば、決定して／ごくらくに生ず。もしまた此しんごとあミだ／仏の梵字とをかきそえて、ち「ち」は「は」のはかに（8ウ）おけば、阿僧祇劫をふるとも、あくしゆにだすことハなし。ごくらくくじやうどの宝座の上に／往生せんときに、ミけんよりびやくごうのくハう／ミやうをはなつがゆへに、くハうミやうしんごんとな／づくとなり。もし女人あつて、女身をいとひ、男身／とならんとして、じゆぢせば、かならずなんしんをえん。／もしつねにじゆぢせん女人ハ、大ぼんでん王とな／ることをえん。そうじてつねにとなふる人は、／あミだ仏荷負し給ふてごくらくくじやうどに／生ぜ

しめ、三十二相八十種好をまんぞくし、すミ／やかに正覺をじやうぜん」といへり。何がゆへにとなら（9オ）ば、ミたハ、大日の智の用なり。大日ハ弥陀の理躰／にてあるがゆへなり。しかるあひだ、議軌に「これ大び／るしやな如來とむりやうじゆ如來との心中の神／呪なり」とのたまへり。又云、「このしんごんをば、百億／無數の諸佛如來のは〔は〕とし、百億無數のぼさ／つの母としてしやか如來つねにくぎやうらるは／いして、正覺をえたまふ」となり。うたがひを生ず／ることなかれ。

たつねミれば、それしやくそんさいごの一句に、「世ハ／ミナ無常」とのたまへる。まことに天地万物・人天／鬼畜に至るまで、いくそばくのしな〔じな〕のその（9ウ）中に、めつせぬもの〔の〕ひとつなし。さて有為無／常の万法を、た〔だ〕「此世ハミナ無常」とのたまへる／一句の中にときたまへる。げにきのふ過けふ過て／四大ひ〔び〕におとろへ、死門夜々にせまり來り、屠／所の羊のあゆミにまかせて、朝夕をしらぬミ／がへん（へん）とうつろふありさまハ、莊周の夢に／ことならじ。いかに可愛の蘭朋も別離のなミ／だあらはれて、雲夢の會にミぢんかはらず。／いかりし人も死しさり、あひせしものハ白骨／と現す。まさに有為轉變のとき、風をつなげる／人のあらん耶。さても此身過去てハ、いかなる（10オ）形をうくるらん。生じ、生し、生し、生ずれども、／生のはじめをしらず。死し、〔死し〕、死し、死すれ／ども、死の終りにくらし。あはれなるその中比、／幻化影像かとおぼしき間に、眼をひらけは境／界あてやかにうかび、耳をそばだつれば、哥詠／音楽のしな〔じな〕おもひをす〔す〕む。千變万轉の妄慮、／刹那〔刹那〕に、しミつもり、心馬惡道にはなれ、三／毒五慾の城におち入、すでになせる善根とも／しふして、すミやかにりんじうの夕とありし劫／ハ、悔ともさらにせんあらまし。いはんや老少かぎ／りなき身なれば、はやくばだい心を生じて（10ウ）つとめんハしかじ。衆罪ハ露として草むらごと／にをくといへども、惠日ハ消事はやしとハ佛陀／の教へ凝諦あらまし。たれももてる惠日を無明／の闇夜にかくしくらまし、滅罪のひか

りをうし／なふかなしきにハあらずや。眞覺ハ本有なるに／しつて不覺。無明ハ本無なるに、まよつて不斷。かなしきにハあらずや。はやく衆罪をめつせし／めんためなれば、此大甚深のしんごんをとき給へる。／たのしきにあらずや。天台の恵心も往生浄土／の本文にこれをそなへ、花嚴の元曉も一切經を／ひらひて他作自受の大意に奉る。或ときハ文殊（11オ）あらハれて、明恵上人にこれをしめし、またあるときハ、化人來りて仁海僧正にこれをうけり。／つねにとなえんともがらハ、何ぞ多生の成仏／をからんや。即身成佛の直路なり。つとめず／んば、あるべからず。

延寶己未夏音、細谷沙門有哲書。

延寶七（己未）年五月吉日、

中野小左衛門板行。

（11ウ）

（白紙）

注

- （1） 日下幸男『近世仏書版本の研究』龍谷大学仏教文化研究所共同研究報告書（二〇〇四年度）平成十七年二月、二一六〜七頁。
- （2） 「近世の光明真言信仰資料（その一）―鏡寛著『光明真言得道按心鈔』（正徳三年（一七二三）版）―」、『人文論集』第四十三号（平成十七年二月）四十八頁。
- （3） 『光明真言經鈔』においても『光明真言經照闇鈔』においても、偽經『光明真言儀軌』の本文は殆ど同じであるが、僅かな違いがある。『光明真言假名抄』が引用している『光明真言儀軌』の本文に、三ヶ所その違いが見られる。即ち真言の「吽發吒娑婆訶」

- 『照闇鈔』では「吽婆吒蘇婆訶」、㉞の「極樂淨土に生ぜしむ」（『照闇鈔』では「極樂淨土に往生せしむ」と㉞の「誦持せば」）『照闇鈔』では「常に誦持せば」の三ヶ所である。
- (4) 大正大藏經八、八六八中・下。
- (5) 偽經『光明真言儀軌』の㉑。
- (6) 偽經『光明真言儀軌』の㉗、㉘、㉙と㉚、㉛。
- (7) 大正大藏經十八、二五四上。
- (8) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「三身トハ者、釋スニ唵ノ字ヲ也。唵ハ歸命ノ義ナリ。約シテ其ノ所歸ニ云フナリ三身ト也。」（續豊山全書六、一四〇上）
- (9) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「萬徳トハ者、釋スニ阿謨伽ヲ。謂ク、不空ノ義ナリ也。大師ノ云ク、不空トハ者、梵ニハ曰ヒ阿目佉トハ也。此ニ云フト無間ト。自證ノ之大樂、化他ノ之大喜、無シ有ルコト無間故ニ曰フ無間ト。無間ト與不空、其ノ義一ナリ也。」（續豊山全書六、一四〇下）
- (10) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「大日經ノ疏ニ云ク、梵音ノ毘盧遮那トハ者、是レ日ノ之別名ナリ。即チ除暗遍明ノ之義ナリ也。然モ世間ノ日ハ、則チ有リ二分。若シ照ラストキンハ其外ヲ、不能ハレ及フコト内ニ。明在テ一邊ニ、不レ至ラニ一邊ニ。又タ唯タ在テ晝ノミ、光リ不燭ラサレ夜ヲ。如來智慧ノ日光ハ、則チ不レ如クニハレ是ノ。遍シテ一切處ニ、作スト大照明ヲ矣。」（續豊山全書六、一四一上）
- (11) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「摩訶トイハ此ニハ云フレ大ト也。穆陀羅トイハ、此ニハ云フレ印ト也。」（續豊山全書六、一四一上）
- (12) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「摩尼婆頭摩トハ者、三昧耶曼荼羅ナリ也。摩尼トイハ、此ニハ云フレ寶ト也。婆頭摩トイハ、此ニハ云フレ紅蓮華ト也。」（續豊山全書六、一四一上）
- (13) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「蘇婆羅トイハ、此ニ云フレ光明ト也。婆羅婆トイハ、此ニ云フレ發ト也。梵語千字文ニ云ク、鉢羅（二合）婆（發也）唎陀耶トハ者、具ニハ云ヒ訖唎陀耶ト、此ニハ云フト心ト也。」（續豊山全書六、一四一上）
- (14) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「大日經ノ疏ニ云ク、次ニ吽ハ是レ恐怖ノ義ナリ。怖シテ一切ノ諸魔ヲ、皆ナ令ム退散セ也。伴吒ハ是レ叱呵ノ之義ナリ。即チ訶叱シテ一切ノ魔障ヲ、令ムト滅没セ也。」（續豊山全書六、一四二下）
- (15) 亮汰『光明真言經鈔』卷下「娑婆訶トハ、此ニ云フレ成就ト也。證得トハ者、成就ノ義也。」（續豊山全書六、一四三上）

(16) 大正大藏經十一、六八〇中。
(17) 真言宗安心全書下、九〇〜一頁。

